

NNNドキュメント'26 「東日本大震災15年 あの朝、私は…」

【番組内容】

今年の3月11日で東日本大震災から15年を迎える。多数の犠牲者を出した未曾有の大災害。さらに、福島第一原発の事故により、多くの人々が日常、そして故郷を奪われた。あの日から私たちは、悲しみや喪失感、絶望の中で懸命に震災後を生きる人々を見つめ続けてきた。2011年3月11日金曜日とは、今を生きる私たちにとってどんな日だったのか。「大津波とは…」 「原発事故とは…」 「復興とは…」 「故郷とは…」 津波の脅威を改めて検証するとともに、震災と向き合ってきた人々の「過去といま」を描く。

【放送日時】2026年3月8日(日)深夜25時05分～26時00分

【放送局】日本テレビ系列29局+沖縄テレビ

【制作局】テレビ岩手・ミヤギテレビ・福島中央テレビ3局共同制作

【番組詳細】

市街地の津波 その脅威 ～ ミヤギテレビ

3月11日、地震の後に宮城・多賀城市で取材先に向かう途中に津波に遭ったミヤギテレビのカメラマン。移動中の車から降り、近くのマンションに逃げ込んでカメラを回し続けた。映し出されたのは、一瞬にして街が津波に飲み込まれていく姿。あれから15年、改めて、あの日を知る人の声を交えながら市街地を襲った津波を検証する。



「必ず、生きよ」津波で殉職した警察官が遺したもの ～ ミヤギテレビ

宮城県気仙沼市の駐在所に勤務していた千田浩二さん(当時30)は、震災発生時、住民の避難誘導中に津波にのまれ帰らぬ人となった。地区には、千田さんを慰霊するための「お地藏様」が建立された。同僚だった警察官は、若手警察官に「命を守る者が犠牲になってはならない、必ず生きろ」と、千田さんの生き様を伝えている。そんな千田さんに憧れた若者が、警察官として歩み始めた。



「おかえり」14年半ぶりの帰宅 ～ テレビ岩手

2025年10月、東日本大震災で津波にのまれ、行方不明となっていた岩手・山田町の山根捺星(やまね・なつせ)さん(当時6歳)の遺骨が震災から14年7か月の時を経て、家族に引き渡された。2023年に宮城県内で見つかった下あごの骨の一部が、DNA型鑑定などの結果から捺星さんのものと判明した。家族や身元判明に至るまでに関わった人々の思いとは。



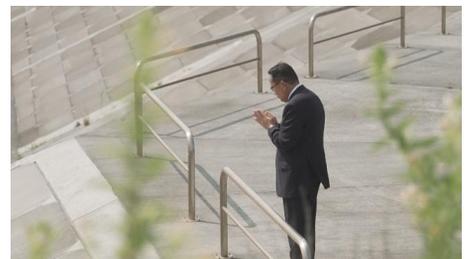
津波と原発事故で故郷と家族を失い…終の棲家は ～ 福島中央テレビ

福島・浪江町の舂倉美津枝さんは津波で母と姉夫婦を失った。原発事故で故郷に立ち入れたのは、事故後2か月以上が経過した5月。そこで、母と姉夫婦が乗っていたと思われる軽乗用車を見つけた。あれから15年、県内各地を転々としたが、終の棲家を選んだのは、故郷・浪江町だった。震災前とは何もかもが変わってしまったが、それでも故郷を選んだ。



管轄全てが原発事故避難区域…震災直後の警察署長 ～ 福島中央テレビ

元・福島県警の警察官、菅野年幸さんは2011年3月末の異動で双葉警察署長の配属が決まっていたが、震災と原発事故の影響で5月に着任した。管内は全て避難区域に指定され、“住民が誰もいない警察署”で陣頭指揮を執った。配属された警察署では2人の警察官が津波の犠牲になった。「殉職した警察官の前で恥ずかしい仕事はできない」当時の思いを聞いた。



【担当記者の思い】



ミヤギテレビ報道部・伊藤 成輝

<略歴> 2024年入社。宮城県仙台市出身。震災当時は小学校3年生で、学校の校庭にいるときに地震が発生。激しい揺れの中、建物が壊れる様子を目の当たりにした。被災体験から、災害時にただ助けを待つ側ではなく、情報を発信したり被災地の声を伝えたりすることで“助けるために動く側”になりたいという思いがあり、入社当初から報道部を志望していた。

2011年3月11日。あの日の朝は、特別な一日ではありませんでした。仕事や学校に向かい、家族と言葉を交わす、いつもと変わらない朝でした。しかしその数時間後、多くの人がかけがえのないものを失いました。取材を続ける中で強く感じてきたのは、多くの人の胸の中に「あの日、言いたかった言葉」「言えなかった言葉」が残り続けているということです。

震災から長い年月が経った今だからこそ、ようやく語ることができた思いもあります。震災から15年が経ち、当時を知らない世代も増えています。一方で、被災した人々にとっては、あの日は決して過去の出来事ではありません。もし「あの日の朝」に戻ることができるなら——そう願った人は少なくないはずです。しかし時間は戻りません。だからこそ、震災を経験した私たちがその記憶を伝え続けていく必要があると感じています。この番組が、震災を経験した人にとっては歩みを振り返る機会となり、震災を知らない世代にとっては「あの日」を考えるきっかけになればと願っています。そして、大切な人にどんな言葉を伝えたいのかを見つめ直す時間になれば幸いです。

NNNドキュメント'26 「ふたりの現在地」



【番組内容】

宮城県石巻市に住む夫婦は、東日本大震災で愛する3人の子どもを失いました。震災から15年、2人はそれぞれの形で震災を受け止め、今を生きる人たちにその恐ろしさを伝えています。夫婦のすれ違いを経験しながらも、決して元通りではない今の関係性にたどり着くまでの思い。そこから浮かび上がるのは、被災地の現状、そして、この年月では何も解決されることのない悲しみでした。

【放送日時】2026年3月22日(日) 深夜24時55分～25時25分放送

【放送局】日本テレビ系列29局+沖縄テレビ

【制作局】ミヤギテレビ

【番組詳細】

東松島市の工房で木工作家として活動する、石巻市の遠藤伸一さんは、東日本大震災の津波で長女の花さん、長男の侃太さん、次女の奏さんと3人の子どもを失いました。遠藤さんは、あの日、大きな揺れの後、子どもたちを自宅に残して車で親戚の安否確認へ。その後、子どもたちは津波にのまれました。自らも津波にのまれながらも一命は取り留めましたが、自らの行動を今なお悔いています。一時は、命を絶つことすら考えた伸一さんでしたが、これからを生きる人に自分の経験を伝えていく道を選びました。「なぜ子どもたちを助けてくれなかったのか？」伸一さんの妻・綾子さんは、当初、伸一さんの活動を素直に受け入れられませんでした。今でも、わが子の死に直面したときの記憶とは向き合えずにいる綾子さん。わが子を失った絶望に、夫への恨みすら感じたこともあったといいます。しかし、震災を経験した立場として、このまま震災と関わらないでいいのか。綾子さんは、石巻市の震災遺構・門脇小学校で“解説ガイド”として働き始めました。次の災害を防ぐため、震災の記憶と向き合い、訪れる人に教訓を伝えています。30年前に結ばれ、3人の子宝にも恵まれた幸せな日々は、震災により一瞬にして奪われました。それでも離れることなく、夫婦として、そして子どもたちの親として、悲しみの中、忘れえぬあの日と向き合ってきた2人。子どもと過ごしてきた時間よりも子どもを失ってから時間が長くなった今、互いに何を思うのか。決して元通りではない、それでも少しずつそろい始めたように見える2人の現在地を伝えます。



▲それぞれのかたちで自身の経験を語り継ぐ夫婦

【放送実績】

2025年12月27日(土)午後3時00分～3時30分

ミヤギテレビ報道特別番組「ふたりの現在地 夫婦として 親として」(宮城ローカル)



【担当記者の思い】

ミヤギテレビ報道部・竹中 弘

<略歴> 2021年入社。茨城県出身。震災当時は中学生で、茨城で震度6強の揺れを経験した。大学進学を機に宮城県へ移り住み、東北で生活する中で震災をより強く意識するようになる。入社時の希望部署・配属先はいずれも報道部ではなかったが、業務を重ねるうちに震災を含む報道に携わりたいという思いが芽生え、報道部を志望するようになる。2024年に報道部へ配属され、記者として現場に立つ。



伸一さんと綾子さんそれぞれへのインタビューをベースに番組を構成しています。わが子を失ったことへの後悔と恨みを経て2人が今語る互いへの思いは、震災に限った話ではなく、一度大きな悲しみに暮れた“夫婦がたどり着いたひとつのかたち”だと感じています。東日本大震災から15年が経ちますが、伸一さんと綾子さんにとっては何の区切りでもなく、何かが変わるわけでもありません。子どもたちと過ごした時間よりも、いなくなってからの方が長くなった今、それでもあの日の記憶と向き合い続け、同じような人を二度と生むまいと教訓を伝えてくれる2人の姿を多くの人に観ていただけると嬉しいです。

ミヤギテレビ報道特別番組 「ひとりじゃない ボクとおばちゃんの15年」



【番組内容】

宮城県石巻市の辺見佳祐さん(22)は、東日本大震災の津波で自動車整備工場を営む両親、祖母、当時小学4年の姉の家族全員を失いました。ひとりぼっちになった佳祐さんを引き取ったのは、仙台で一人暮らしをしていた伯母の日野玲子さん。2人は被災を免れた石巻市の佳祐さんの自宅2階で一緒に暮らし始めます。玲子さんにとっては初めての子育て。父親に憧れていた佳祐さんのために未経験ながら佳祐さんの両親が営んでいた自動車整備工場の経営も引き継ぎました。そんな玲子さんの姿を見てか、佳祐さんは自動車整備士になり、いつか工場を継ごうと修業の日々を送っています。

【放送日時】2026年4月5日(日)午後3時00分～3時55分

【放送局】ミヤギテレビにて宮城県内ローカル放送

【制作局】ミヤギテレビ

【番組詳細】

胸に秘めた思いと家族の記憶

震災当時、小学校の体育館に避難し家族の迎えを待った佳祐さん。玲子さんと一緒に暮らしてからも、家族は生きていて、いつか迎えに来てくれると思いつけていたといいます。時の経過とともに家族と過ごした思い出が少しずつ薄らいでいく中、貴重な思い出の品が見つかりました。それを見た佳祐さんはどう受け止めたのか……。

ボクとおばちゃんの15年

東日本大震災の年に取材を始めてから15年。震災当時7歳だった佳祐さんは22歳になり、玲子さんと支え合いながら日々を送っています。そんな2人の歩みを心温まるシーンを中心にお伝えします。



【放送実績】

- 2014年3月 NNNドキュメント'14「ひとりじゃない 震災遺児は、今」
- 2016年3月 NNNドキュメント'16「ひとりじゃない ボクとおぼちゃんの5年間」
- 2016年3月 ミヤギテレビ報道特別番組「ひとりじゃない」(宮城ローカル)
- 2022年9月 ミヤギテレビ報道特別番組「ひとりじゃない 家族になったボクとおぼちゃん」(宮城ローカル)
- 2023年4月 NNNドキュメント'23「ひとりじゃない 家族になったボクとおぼちゃん」

★2023年4月のNNNドキュメント'23放送後にYouTubeにアップロードしたダイジェスト版は、**約1,043万回再生**を記録。(2026年2月25日現在)
コメント欄には2,200件を超えるあたたかい声が寄せられています。

【担当記者の思い】

ミヤギテレビ報道部・佐々木 博正

<略歴> 震災発生時は報道部に所属。発災直後から連日にわたり震災関連の報道に携わり、現場の状況や被災地の動きを伝え続けた。2011年4月には岩手・宮城・福島の3局共同制作による東日本大震災ドキュメンタリー番組の制作に参加。以降も継続して震災をテーマにした企画・番組を手がけている。同年冬に日野さん・辺見さんと出会い、取材を重ね、2014年の「ひとりじゃない」の放送に至る。人事異動で報道部を離れている期間が8年ほどあったが、その間も2人と連絡を取り合い、交流を続けていた。



最初に2人に取材をさせて頂いた2011年。心に決めたのは、「取材をさせていただく限りは中途半端な向き合い方をしないこと」。相当な覚悟を持って取材を受けてくださった2人からすれば、当然のことです。東日本大震災という未曾有の災害がもたらした計り知れない悲しみの中で、支え合いながら懸命に前を向いて生きる姿を15年間の取材を通して見つめてきました。寄り添う日々を重ねた2人が信頼し合える「家族」になっていく軌跡が多くの方に伝わればと思います。

ミヤギnews every.内企画 「あす大災害、だとしたら？」



【番組内容】

日本テレビ系列の各局が取り組む防災・減災プロジェクト「あす大災害、だとしたら？」。ミヤギテレビでは東日本大震災の教訓を未来の防災につなげようと、若手記者がこれまでに取材した人達に話を聞きます。

【放送日時】

月曜日から金曜日・夕方6時15分～7時00分放送「ミヤギnews every.」内で全6回放送予定

- ▶ 2月11日(水): 気仙沼・すがとよ酒店 菅原文子さん
- ▶ 2月18日(水): 石巻・日和幼稚園遺族 佐藤美香さん
- ▶ 2月25日(水): 閑上の記憶 丹野祐子さん
- ▶ 3月4日(水): 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館館長 及川淳之助さん
- ▶ 3月9日(月): 大川伝承の会 佐藤敏郎さん
- ▶ 3月10日(火): 常磐山元自動車学校で娘を亡くした大久保三夫さん、恵子さん



▲若手記者たちが取材し、自らナレーションも担当して思いを届ける

ミヤギnews every.内企画 「記憶のまちへ」

記憶のまちへ



【番組内容】

あの日、津波で失われた故郷の景色…。「震災前」のまちの記憶を、ミヤギテレビに残る映像と地元の人々の声とともに振り返ります。

【放送日時】

月曜日から金曜日・夕方6時15分～7時00分放送「ミヤギnews every.」内で全7回放送予定

- ▶ 3月2日(月): 気仙沼市
- ▶ 3月3日(火): 石巻市
- ▶ 3月4日(水): 亘理町・山元町
- ▶ 3月5日(木): 名取市・閑上地区
- ▶ 3月6日(金): 女川町
- ▶ 3月9日(月): 仙台市・荒浜地区
- ▶ 3月10日(火): 南三陸町

【担当記者の思い】

ミヤギテレビ報道部・伊藤 有里

<略歴> 2021年入社。石巻市雄勝町出身。震災当時は小学校6年生であった。発災時は学校帰りで、高台へ避難し、津波による大きな被害を目の当たりにした。入社動機のひとつとして、当事者として震災と向き合ってきた経験から、震災に関する情報発信に関わりたいという思いがあった。入社1年目から報道部に配属され、これまで複数の東日本大震災のドキュメンタリー制作に携わった経験をもつ。



「あす大災害、だとしたら？」

ミヤギテレビではこれまで、被災された多くの方に、東日本大震災の経験や大切な人への思いを取材させていただきました。あの日から15年が経とうとする中、震災の記憶の継承は喫緊の課題です。入社1、2年目の記者が改めて被災された方に経験や教訓を伺うことで、震災を知らない若い世代にも震災を「じぶんごと」として考えてもらうきっかけになればと思います。

「記憶のまちへ」

東日本大震災から15年が経ち、復興事業を経て沿岸部の街並みは生まれ変わりました。一方で、「震災前の町並みの記憶は少しずつ薄れてきている」という声もあります。

ミヤギテレビに残る56年分の映像から、震災前の町の記憶に触れることで、確かにあった故郷の姿に思いを馳せてもらえればうれしいです。